

IFRS 財団 Erkki Liikanen 評議員会議長へのインタビュー



左から Lee White 氏、Erkki Liikanen 氏、釜 和明氏

IFRS 財団評議員会議長 **Erkki Liikanen**

IFRS 財団エグゼクティブ・ディレクター **Lee White**

〔インタビュアー〕 FASF 理事長 **釜 和明**

IFRS 財団 Erkki Liikanen 評議員会議長へのインタビュー

はじめに

2019年2月初めにIFRS財団のErkki Liikanen 評議員会議長及びLee White エグゼクティブ・ディレクターが来日されました。お二人は現在の役職に就任後、初めての来日であり、この機会をとらえて、IFRS財団の活動、グローバルな会計基準の役割、アジア・オセアニア地域との関係、及び日本におけるIFRSの適用などについて、財務会計基準機構(FASF)の釜和明理事長がインタビューを行いました。この記事は、インタビューの内容を翻訳したものです。

釜理事長 私はFASFの理事長を務めております釜と申します。本日は、IFRS財団のErkki Liikanen 評議員会議長及びLee White エグゼクティブ・ディレクターが来日された機会をとらえて、インタビューをさせていただくことになりました。お忙しいところお時間を頂戴し大変ありがとうございます。

まず、日本に来られるのは初めてではないとお聞きしていますが、これまで日本とはどのような関わりがありましたでしょうか。

Liikanen 議長 来日としては10回目くらいですが、肩書は5つ目になると思います。最初の肩書は、Outokumpu Metallurgic社という

企業の役員として来日し、銅の製錬の特別な技術である自熔精錬所を日本企業に販売しに来ました。2つ目の肩書は、1980年代の金融危機の前になりますが、フィンランドの財務大臣として来日し、その時には大蔵省(当時)の方々や銀行関係者とお会いしました。3つ目の肩書は、欧州委員会の委員として、日・EUビジネス・ラウンドテーブルの議長を日本の同僚と共同で務めるために来日しました。4つ目の肩書は、フィンランド中央銀行の総裁として、東京で国際決済銀行(BIS)や国際通貨基金(IMF)の会議があった時に来しました。そして、5つ目の肩書は、今回のIFRS財団の評議員会議長になります。

光栄にも、このような形で、幅広く日本経済について勉強する機会がありました。

IFRS 財団について

釜理事長 それでは次に、IFRS財団の活動についてお聞きしたいと思います。IFRS財団評議員会の議長に就任される前のIFRS財団の印象はどのようなものでしたでしょうか。

Liikanen 議長 ヨーロッパの会計基準として何がよいのかという問題の解決策として、欧州委員会がIFRSを採用することとした2000年代の初めの頃から、IFRS財団のことも

IFRS のことも知っていました。IFRS を採用することにしたのは正しい決定だったと思います。

釜理事長 実際に IFRS 財団評議員会の議長に就任され、その印象は変わりましたでしょうか。

Liikanen 議長 それほど印象が変わったというわけではないのですが、就任後、IFRS 財団について勉強をしまして、理解は深まりました。例えば、評議員会、IASB、モニタリング・ボードについての勉強をして、IFRS 財団という組織が極めてグローバルな組織であるということについて感銘を受けております。

釜理事長 現在の IFRS 財団の活動について、課題があるとすればどのようなことでしょうか。

Liikanen 議長 評議員会の議長に就任して、IFRS 財団について勉強した結果として、これから何をしなければいけないか、という考えが少しクリアになった気がしています。それには主に2つあると思っています。

1つ目はグローバルな経済において、IFRS を幅広く適用していくことです。2つ目は、例えば、デジタル化とか持続可能な開発のために

何が必要であるかなど、我々が直面している新たな課題について分析しなければならないということです。いうまでもなく、我々はグローバルに影響力を拡大する必要があり、できるだけ多くの企業がIFRSを採用し適用してくれることが、グローバルな経済の利益になると思っています。

グローバルな会計基準の役割

釜理事長 それでは次にグローバルな会計基準の役割についてお聞きしたいと思います。

現在、IFRS は140を超える国で要求されており、さらに多くの国でIFRSの使用が認められているとお聞きしています。国際的に1つの会計基準が使われる便益について、どのようにお考えかお聞かせください。

Liikanen 議長 私は、財とサービスに関して、自由な開かれた貿易を信奉しています。それが、経済成長にとって有益であると考えています。

そして、資本市場においては、用いられている会計基準がほぼ同じでなければ、便益を享受することができません。会計基準がほぼ同じであれば、資本の調達コストは下がり、透明性は向上します。

我々は正しい方向に進んでいると思います。より多くの企業がIFRSを適用するように、この方向でさらに前進する必要があると思います。

釜理事長 金融危機当時、議長はフィンランド中央銀行総裁でした。金融安定化と会計基準の関係についてどのようにお考えかお聞かせください。

Liikanen 議長 とてもいいご質問をいただきました。これには2つの側面があるかと思います。1つの側面はプルデンシャル規制の側



IFRS 財団評議員会議長 Erkki Liikanen 氏

面、すなわち、健全性に関する規制の側面であり、もう1つの側面は財務報告基準の側面です。

まず、プルデンシャル規制は、金融当局が監督をするものであり、その狙いはプルデンス、つまり健全性であり、嵐の時にも銀行が生き残ることができるように、資本が十分にあるかどうかを重視します。

一方で、財務報告基準には別の役割があります。企業がどのような状態にあり、どのような業績を上げているか、また、将来の新たな課題に取り組む準備がどれだけできているかについて知ることができるように、投資家に情報を提供することです。

これらの役割は相互補完的なものです。

アジア・オセアニア地域との関係

釜理事長 次に、アジア・オセアニア地域についてお聞きしたいと思います。アジア・オセアニア地域について、どのような印象をお持ちでしょうか。また、アジア・オセアニア地域に対する期待をお聞かせください。

Liikanen 議長 アジア・オセアニア会計基準設定主体グループ (AOSSG) のみなさんに、先日、クアラルンプールで開催された評議員会の会議でお会いしました。アジア・オセアニア地域は、多くの人口を有する多くの国で構成される地域であり、同時に、真に先進的な国から新興国まで、多様性に富んだ地域でもあります。我々はこの地域を非常に重視しており、その証しとして、クアラルンプールから東京に来ています。クアラルンプールでの評議員会の会議に非常に多くの方が AOSSG から参加しました。AOSSG は非常に力のある組織です。

ロンドン以外の唯一のリエゾンオフィスが東京にあるということも、アジア・オセアニア

地域を重視している証しだと思います。このインタビューの前に、大手町にあるアジア・オセアニアオフィスに行ってきました。ロンドンにおける IFRS 財団の日常業務に完全に参加できるように情報通信設備が整っており、非常に良い環境だと思います。

AOSSG がクアラルンプールでの評議員会の会議に参加したことと、リエゾンオフィスが東京にあるということを押まえると、IFRS ファミリーにおけるアジア・オセアニアの役割はますます大きくなっているといえると思います。

釜理事長 今お話がありましたように、2012年に IFRS 財団の唯一の海外のオフィスを東京に設けていただいています。アジア・オセアニアオフィスに対する期待をお聞かせください。

Liikanen 議長 ここは、業務を日常的に執行している White エグゼクティブ・ディレクターにお願いしたいと思います。

White エグゼクティブ・ディレクター アジア・オセアニアオフィスに対する期待としては、おそらく4つあると思います。

1つ目は、アジア・オセアニアオフィスのメンバーが直接、基準の設定に関与し、技術的な



IFRS 財団エグゼクティブ・ディレクター

Lee White 氏

レベルに関して非常に良い関係がロンドンのIFRS財団と持てることです。

2つ目は、アジア・オセアニア地域のステークホルダーとの間で有益な関係を築くことができることです。

3つ目は、アジア・オセアニア地域全体を通じて、IFRSとつながっているという感覚があること、IFRSに積極的に関わりがあること、そしてIFRSが促進されることを確保することです。

最後の4つ目は、アジア・オセアニア地域にいる優秀な人材をしっかりと活用することです。グローバルに優秀な人材の奪い合いは戦いです。この地域からは本当に質の高い優秀な人材が輩出されていますが、今後もそれが継続するよう期待しています。

日本におけるIFRS

釜理事長 次に日本におけるIFRSの適用についてお聞きしたいと思います。日本はIFRSを任意適用しており、現在、約200社が適用、それらの企業の時価総額は日本市場全体の約3分の1になっています。まずは任意適用という手法について、どのようにお考えでしょうか。

Liikanen議長 会計基準については、どの国にもそれぞれ独自の経緯や歴史があります。

先ほど申し上げましたように、私自身、EU全体でIFRSを強制適用することを決定したときに欧州委員会の委員をしておりました。ヨーロッパとしてはゼロからのスタートでしたので、この決定は欧州においては良い決定であったと思います。

日本には日本独自の経緯があり、その中でIFRSの任意適用は非常に成功していると思います。今後についても、是非頑張ってもらいたいと考えています。このインタビューの前に、

FASFによるIFRSの任意適用の拡大に向けた取組みについて伺いました。私は、それらの取組みを全面的に支持したいと思います。

釜理事長 日本では、FASFが窓口になりIFRS財団に資金拠出を行っており、また、人的貢献もしています。今後の日本に対する期待をお聞かせください。

Liikanen議長 IFRSがグローバルな会計基準であるためには、それを開発する組織自体がグローバルに運営され、かつグローバルに基準が適用され、各国の国内においても適用されなければなりません。また、組織の資金調達は、すべての地域が応分の負担をする形でグローバルに行わなければなりません。

私は、日本には応分以上の貢献をしていただいていると認識しており、特にFASFが証券取引所と一緒にやってきた取組みを歓迎しています。アジア・オセアニア地域の参加国がさらに増えれば、いうまでもなく、この地域の可能性はますます大きくなります。

White エグゼクティブ・ディレクター 私からも一言追加させていただきます。日本にはこれまで、評議員のレベルから国際会計基準審議会（IASB）のボードメンバーのレベル、先ほ



FASF 理事長 釜 和明氏

ど述べましたスタッフのレベルに至るまで、グローバルな会計基準の開発に対して顕著な貢献をしていただいています。これらの貢献はこれまで大成功であったといえますが、我々は、今後もそのような方々に参加していただけることを期待しています。

おわりに

釜理事長 そろそろインタビューの終了の時間となりました。最後に Liikanen 議長、読者に一言メッセージをいただけますでしょうか。

Liikanen 議長 就任して極めて早い段階で日本に招待していただけたことに大変感謝しています。今回の出張は、IFRS 財団の評議員会議長としては、ヨーロッパ以外への出張としては初めてのものとなります。世界のさまざまな地域に行って、自分が知らなかったことを勉強できることは、大変素晴らしいことです。日本の取組みについては全面的に信頼しておりますので、これまでどおり続けていただきたいと思っています。

釜理事長 本日は、ご多忙の中、インタビューに応じていただき大変ありがとうございました。日本の関係者は、IFRS がさらにグローバルで高品質な会計基準になることを期待しております。FASB はじめ関係者は、IFRS 財団に対する協力を惜しみませんので、引き続き、よろしくお願いいたします。

(インタビューは、2019年2月1日に実施されました。)